生き残るには……

シャム猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生き残るには……

【Ｎコード】
Ｎ２３４４Ｚ

【作者名】
シャム猫

【あらすじ】
あるウイルスが世界中に流行し日本でもゾンビに対抗するために徴兵された一人の少年の物語です

チャプター０（前書き）

どうしてもゾンビ物が書きたい！
そんな風に思ったのが運のつき気がついたら投稿してました
ですので気ままに長い目で読んでください
ちなみに不定期更新です

チャプター0

ガタッガタタッ

俺は揺れで目を覚ました
目の前には学生服を着ている俺と同い年位の高校生が虚ろな目で膝をを抱えてる
そいつの隣の奴も同じようにしている２０人位が乗り込んだ軍用トラックは山道を走ってる用に揺れが激しい

「おい、大丈夫か？」
隣の少年が声をかけてきた
紺色のジャケットに赤と緑のネクタイ身長は俺と同じくらいだ

「ああ……大丈夫」

「俺は五十嵐拓海歳は１６。よろしく」
爽やかに笑う青年。なかなかイケメンだ
「大久保光樹同じく１６だ。よろしく」
取り合えず握手する

「顔色悪いよ？どうしたの？」

「……どうしたんだっけ？」
なんだろう思い出せない

「変わってるねー」
拓海が笑いながらしゃべる

するとちょうどトラックが止まった
「降車開始！ぐずぐずするな！」
一番奥にいた男が叫ぶ
「おっと。じゃあ行こうか。」
拓海が腰を上げる
続いて俺もトラックを降りる
広いグラウンドを見下ろす用にその建物がそびえ立ってる
パッと見たら学校の用だがじっくり見るとおかしなところが見えてくる
駐車場に停められた戦車やＡＰＣ
入り口に設置された機関銃陣地
アサルトライフルを肩に担ぎ校庭を歩く高校生
そしてそれらを囲む有刺鉄線（電流つき）
「来ちまったな……兵士養成学校」
２０××年　人類が絶滅危惧種に認定された
★　★
事の発端はひとつのテロから始まった
あるテロリストが某国の細菌研究所からあるウイルスを盗み出した
そのウイルスは人に感染しそのウイルスに犯されると人は理性を失

いただ食欲を求めるゾンビになるのだ
そのウイルスが恐ろしいスピードで世界中に流行一年も経たないうちに世界の人口は半分近くになった
それは日本も影響下にあった
半月で日本国民の６割がゾンビになったため日本政府は『対ゾンビ交戦条例』を作った
簡単に言えばゾンビ相手なら銃とか撃ってもいいよというものだった
そして政府はもうひとつ法案を作った
それが徴兵令だ
元々警察や自衛隊など戦う戦力が少なすぎる日本は苦肉の策として
第二次世界大戦以来の徴兵制度をとった
満１６歳以上の少年少女は特定の教育機関に行くそれが兵士学校
ここで兵士としての教育を受けてそのままゾンビ討伐や避難所の警備などなど色々な仕事を任せられるそうだ（所長の長い演説の一部抜粋）
そして今年で１６歳を迎えた俺は実家の静岡県からトラックで揺れること４時間東京の訓練所に来たのだ

チャプター０（後書き）

今回は紹介だけです
次回からガンガン戦闘シーンとか入れてきます
ご意見ご感想お待ちしております

ちゃぷたー1（前書き）

どうも不定期更新なので次出すのは明日なのか明後日なのかわかりません
あと他の作家様との表現が被ってしまったりした場合はどうか温かい目でスルーしてください

ちゃぷたー1

「ぐずぐずするな！走れ！さっさとしろ！このノロマどもが！」
元陸上自衛隊の長田輝彦教官が鬼のような、いや鬼以上の剣幕で訓練兵（最初のトラックに乗ってた２０人）に激を飛ばす

「遅いぞ！もう１０周！」
新兵達の疲れた声を出す

「これじゃあいつ終わるかね？」
拓海が流れる汗をぬぐい走りながら話しかける
中学時代は陸上部の長距離走者の彼は持久力はあるようだ
かくいう俺も陸上部だが専門は短距離さすがにバテてきた

「しかし訓練がここまできついとは……」
さすがに五十嵐も苦しそうだ
ここでの生活もなんだかんだ言ってもう一週間だがキツイ
朝は５時起きで１０ｋｍランニングに腹筋、腕立て共に２０００回
そのあと朝食の後に１０分の休憩の後で朝のメニューを５セット＋けんすい、アスレチック、エトセトラ
とにかく大変なのだ食休めの時間だけがゆういつ休める時間だ

「やっと休憩時間かー」
朝の訓練が終わり朝食を食べたあとの休憩時間拓海と寮の（ちなみに同じ部屋）でくつろいでいると

「すいません。大久保は…っているし」
同級生の西山明久
が入ってきた

小学校からの知り合いで小柄な体だが破天荒な正確に昔から変わらない童顔だが性格はかなりイタズラ好きの同じ隊の友人である

「何のようだ？」
そう聞くと

「同室の子が凄い無口でつまらないからこっちきた。」

「へぇーその子名前は？」

「植野憂（うえのゆう）って言ってた」

「ああ、植野くんか。彼は人見知りなんだよ」
どうやら五十嵐の知り合いのようだ

「けど、あの子はなんであんなに無口なの？」

「さあ？」
首を傾げる五十嵐

「専門は狙撃科のはずだけど……」

「スナイパーか」

ちょっとした解説
民間兵士学校では選ぶ科目によって兵士としての役割が変わってくる

・歩兵技能科

主に避難所の警備や戦車随伴などを行う
ゾンビ討伐の要（大久保や五十嵐はここ）

・狙撃科
後方や遠距離からの支援を行う科目他にも索敵や監視など見張りも兼ねる

・情報技術科
通信や無線等情報網の管理を行う避難民の情報等も受け付けてる

・車両操作科
戦車やヘリを使って兵士や避難民の輸送や避難を手助けする

・整備開発科
銃や車両のメンテナンスや装備の開発等も行う壊れた施設の修理等も行う

・衛生治療科
兵士や避難民の健康管理や薬の調合を担当する衛生兵として現場に行くこともある

・特殊工作科
各科目のエリートを集めた精鋭部隊一般兵立ち入り禁止区域の調査や政府の重要要人の身辺警護等を行う今の所十人の一個小隊が一つしかない

「スナイパーか……仲良くしたら援護してくれるかな？」

「彼は受けた恩は忘れないから。」

五十嵐君が頷く

「おい！そろそろ時間だ！新兵どもさっさと集まれ！」
グラウンドの中心からでも聞こえるくらいの音量で叫んでた

「ヤバイ！急げ！」
そうして三人で走り出した

ちゃぷたー1（後書き）

短い……そろそろ銃とか出します
ご意見ご感想お待ちしております

小学校編（前書き）

色々あって訓練のシーンは割愛しました
理由はめんどくさいからです

小学校編

ガタッガタタッ

そしてまた揺れで目を覚ます

狭い軍用トラックの中に２０人位の少年少女が乗ってる

……デジャヴ

ただ前とは違うのは前にいる少年は迷彩服に身を包み右肩にＭ４カービンを背負ってる

そして自分も同じく迷彩柄の服に迷彩塗装のＭ４カービンを持ってる

「ついに初出撃だね。大久保君」

五十嵐が戦場に行くとは思えないくらいに爽やかに話しかけてくる

「ああ、何だかあっという間だな」

前回の話の後射撃訓練をしてそして一週間で兵士としての訓練が終了

そして三等歩兵という階級を手に入れあれよあれよと言う間に銃を

渡され気がついたらトラックの中だ

「……本当にあっという間すぎるな」

何だろうこの悪意は？

「あ、あの……」

「はい？」

右から控え目な声が聞こえた

何だか凄く小さく縮こまっている少女を見る
小さな体の割りに長い黒髪が印書的な少女は彫刻の用に整った顔を青くしながらしゃべる

「どうしたの具合悪いの？」

「い、いや！違うんです！そうじゃなくてその…あの……」
なぜか涙目になりながら呟いた

「か、肩の虫を取ってください……」
猫に睨まれたネズミみたいになりながらも言う

「虫？あ、本当だ」
彼女の肩にクワガタみたいな虫が乗ってた

「はい、とったよ」
虫を掴んで外に投げる

「ありがとうございました。虫苦手で。私は天野陽奈（あまの ひな）です。三等衛生技師です」
そして軽く会釈

「どうも俺は大久保光樹三等歩兵」

「同じく五十嵐拓海よろしく」

「人との会話が苦手で何だか二人と喋るのはは心強いです。」

「俺たちも衛生兵と知り合いになれるなんて光栄だよ」
戦場的な意味で

「お前ら！搭乗前に確認したがもう一度言っとくぞ！今回の任務はゾンビ共に襲撃を受けた避難所の奪還及び避難民の誘導だ！他の兵士や噛まれた奴は敵とみなせ！」
長田教官が怒鳴る

「じゃあ大久保君そうなった時はごめんね」

「いや、まだ死ぬとは限らないし」

「ごめんなさい。大久保さん」

「陽奈さんまで！？」
これはひどい

するとちょうどトラックが止まった

「各員、降車開始！」

そして俺たちは銃を手にトラックを降りた

小学校編（後書き）

ダグに「ゾンビ」を入れました
ご意見ご感想お待ちしております

祝初戦場（前書き）

やっとこさ戦闘が始まりました
銃は作者の趣味が１００％です

祝初戦場

避難所になっている小学校の校門に着いた
まず降りて見えたのは血の海だった

右肩から先が無いもの

喉を押さえて死んでるもの

内臓を撒き散らしながら死んだもの

色々な死に方だが共通しているのは苦しそうな表情をしている事だ

降車した兵士達は吐き気を催したり中には知り合いの無惨な死に方を見て泣きじゃくる者もいる

「Aチームは裏口を！Bチームは中庭に行け！CチームとDチームは俺についてこい！」
長田教官の声で兵士達が動き出す

「よしいくぞー！」

『おー！！』
俺と五十嵐はCチーム陽奈さんはBチームだ

「じゃ、また後で」

「生きて会いましょう大久保さん」
陽奈さんが笑いかける

「前方からゾンビの集団！」

「撃て！」

ダダダダダダダダダダダタ

「いくぞー！」

長田教官の号令で建物に突っ込む

☆　☆

避難民のいる体育館の前に数人の兵士がバリケードを建てていた

「増援だ！撃ち方やめ！」

銃声が止む

「行くぞ！各員敵を順次撃破！」

長田教官がＭＰ５Ｋを撃つ

タタタ！タタタタタタタ！

ダンダンダン！

ダダダダダダダダ

銃弾をゾンビの頭に当てながら少しずつ体育館の入口に進む

「助かった。私は武藤修次（むとうしゅうじ）二等歩兵です。」

「お前みたいなやつがここを？」

「長戸一等伍長は避難民を助ける最中奴らに……」

そこで彼は押し黙る

「よしわかった。中には何人位いる？」

「５０人位です。」

「よしわかった。Ｃチーム！俺と一緒に避難民の誘導Ｄチームは」

ザザ《応答願う！》

《こちらＢチーム！誰か応答を！》

連絡無線を背負った兵士のマイクから男の声が聞こえた

「どうした？」

無線機をとり話す

《中庭で交戦中見たことも無いような敵が我々をいきなり襲撃してっあああー！》

そこで無線は途絶えた

「おい！どうした？Ｂチーム！」

呼び掛けるが応答は無い

「くそっ！」

乱暴に無線機を戻す

「大久保！お前何人か連れてってＢチームを援護しろ！」

「教官マジですか？て言うかなんで俺？」
「帰ったら教えてやるさあ行け！」
強引に言われたどうしよう
「取り合えず五十嵐と西山来てくれ」
『わかった』
二人が頷く
「あと、木下お前もいいか？」
「いいですよ。」
木下仁（きのしたじん）女の子だが歩兵科でも突撃に関しては右に出る人はいない
近接戦闘に特化している
「武藤さん。案内頼めますか？」
「わかりました。こっちです」
そう言って走り出す
☆　☆
大久保達が体育館に着く少し前
「クリア！」
「こっちもだ！」

「中庭を確保した！車両班に報告しろ」
兵士達が生きたゾンビがいないか確認をしてるなか
「衛生兵！こいつを診てやってくれ」
「ハイハイー今いきます」
陽奈がＵＺＩを肩掛けして声の方へいく
「…捻挫ですね。立てますか？」
「……これくらい」
片足を引きずりながら歩く
「なんだあれは！？」
その場にいた全員が振り向く
「う、嘘だろ……」
そこには三階建てのマンションを楽々こす巨大なゾンビが立ってた

祝初戦場（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

疲れを知らない世代がうらやましい（前書き）

少しギャグを入れてみました

疲れを知らない世代がうらやましい

ドンドンドンドン！
ダダ！ダダダダ！ダダダダダ！

「急げ急げ！Ｂチームのいるグラウンドに早く！」

「この道はダメです校内を通りましょう！こっちです！」
そう言って窓ガラスをライフルのストックで割る

「早く！こっちです！」
武藤さんが手招きしてる

「全員入りました！」
西山が叫ぶ

「よしいくぞ！」

☆　☆

「この通路の先がグラウンドです」
渡り廊下走りながら伝えてくれる

「急ぐぞ！」
西山が渡り廊下の扉を蹴破る

ガシャン！

「な、んだと……」
扉を開けた先には巨大なゾンビがいた
身長が高いとかそう言う次元じゃない本当に体事態が巨大化したようなゾンビが立ってた
肌の色は茶色くなって目は白目になり見た目は普通のゾンビだがやはり巨大だナイターライト（夜中のグラウンドを照らすスポットライト）ぐらいある

「こ、こんなのがいるなんて……いままで確認されたなかで一番巨大だね」
隣で五十嵐が呟く

「襲撃当時はあんなやつ居なかったのに……いったい何処から？」
武藤さんが目を見開いて驚く

「……名前を決めないと」
ボソッと西山が呟く

『どうでも良いだろ！』
西山以外の全員でつっこむ

「けど、お前この後どう呼べばいいんだ？普通のゾンビも入るから何だか紛らわしいぞ読者のことも考えろ」
確かに普通サイズのゾンビも周囲をうろうろしてる

「じゃあデカゾンビってのは？」
五十嵐が言う

「却下。次」
3秒位で流れる
「ゾンビデカは？」
「木下君。それでは何だかゾンビが刑事やってるみたいだよ。却下」
「じゃあ古西デカ」
「誰だよ！て言うかゾンビどこいった？」
悪ノリの成功した武藤君は満足そうだ
「……ジャイアントゾンビ」
俺が言ったら空気が止まった
……何だろうこのやっちゃった感は
ダンダン！
「発砲音？生存者がいる！」
その瞬間指示を出す
「木下と五十嵐！二人であのジャイアントゾンビの気を引け！」
「わかった」
「了解」
近接戦闘の得意な木下と中距離支援の得意な二人ならやってくれる
と見込んでの指示だ

「西山は長田教官に連絡その後は周囲のゾンビ掃討武藤さんと俺で生存者を助ける」

「イエス！ボス！」

「了解しました。」

「五十嵐さん援護して！」
早速木下がスパス１５をギガゾンビ（めんどくさいのでこれからはこうします）に構え撃ちながらギガゾンビに向かい走る

タンタンタン

五十嵐が８９式小銃で木下の進行ルートの敵を狙い撃つ

「食らえ！」
スパスから放たれたスラッグ弾がギガゾンビの肩に穴を開ける

「武藤君我々も急ごう」

「わかりました。」
だが次の瞬間

ドゴーン！

武藤君の体すれすれにナイターライトが倒れてきた
どうやらギガゾンビが倒したようだ

「大丈夫か？」
倒れたライトのそばにいた武藤にきく

「……」

「武藤？」

「……」

バタリ

「武藤！」

そのまま前に倒れた

疲れを知らない世代がうらやましい（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

男にとって金●を打つのはなんとしても避けたいらしい（前書き）

下ネタは温かな目でスルｒｙ

男にとって金●を打つのはなんとしても避けたいらしい

今、俺の前で倒れた武藤君

「武藤！しっかりしろ！」

取り合えず武藤を仰向けにする

「どこをケガ……し…た？」

武藤の様子に違和感を感じる

「お前、大丈夫？」

股の辺りを押さえて水が無い魚みたいになってる

「お前、まさか……」

もしやとは思ったら

ゴトリ

武藤の股からソフトボール大のコンクリート片が転がり出る

「やっぱりか……」

ライトが倒れた際飛んできた破片が金●に直撃そして悶絶

そう言えば倒れた時も前に倒れたな

「しばらく休んで動ける用になったら援護しろ。無理するなよ」

微かに頷く

普通のゾンビは音に誘われるので（ギガゾンビは知らんが）喋る余

裕の無い武藤は大丈夫だろ
……ついてないな。武藤
取り合えず合掌

☆　☆

ゴスッ
M４カービンのストックでゾンビの頭を割る
「もう弾があまり無いな……」
最後のマガジンをリロードする

「誰が！助けて！」
女性の用な叫び声が聞こえる

「大丈夫か？」
ゾンビの頭を撃ちながらなんとか生存者の所に着く

「大丈夫か？って陽奈！」

「大久保さん！助けて！」
陽奈の膝に一人の兵士が苦しそうに倒れてる
陽奈は手にグロック１９を握ってる
さっきから撃ってたのはお前か

「彼は？」

「あのでっかいゾンビに蹴られて……」

「下半身の感覚が無いんだ……」
「しっかりしろよ。西山！」
取り合えず近くをうろうろしてる西山を連れてくる
「武藤はどうしたんだ？何だか前屈みになってるけど……」
「金●を痛めた」
「ああ……痛いよね」
同情と哀れみに満ちた視線を向ける
「取り合えずこいつを運ぶぞ陽奈手伝え」
「わかりました。」
倒れてる兵士からグロックのマガジンを抜き取る彼の銃だったか
「行くぞ！」
Ｍ４を構える
☆　☆
ドンドンドン
「リロード！援護して！」
木下がスパスに１２番ゲージ弾を込める

「ぐおぉぉぉぉぉぉ！！」
ギガゾンビが唸りをあげて右拳を降り下ろす
ダンダン
「がぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
右肩に親指位の穴が２つ開く
「五十嵐君ナイスショット。狙撃科に行ったら？」
無線で伝える
《そこまで遠くは見えないよ》
木下から３０ｍ位離れた場所から８９式小銃を構えてた
「しかし強いな。頭を撃っても全然効かないし」
《他の場所も全然効かないしね。厄介だよな》
「取り合えず撃ちながら弱点を探すよ」
《了解》
リロードを終えたスパスを構える
☆　☆
「よし、運びだし完了！」
引っ越し作業員みたいになったが取り合えず近くにいたＡチームの兵士に渡した

「俺らも戻るぞ。」
「了解」
3人でグラウンドに戻る

☆　☆

「いつ見てもデケーな」
ギガゾンビが木下を正確に追い詰めてく
「いつってかさっき見たばかりだけどね」
西山がつっこむ

「それよりどうする？生存者は救助したしもうここに用は無いだろう。早くトラックに乗って帰ろうぜ」
確かに助けた彼以外は全員ギガゾンビにやられたみたいだしAチームの話では避難民は全員脱出したみたいだしもうここにいる用は無いだろうだが

「だめだ」
「なんで！？」
「今トラックに乗って基地に帰ったらもれなくあいつも招待する事になるそれに俺はあのデカ物から逃げ切る自信がない」
「……確かにそうだな」

「大久保さん。何か解決策をあいつに勝つには骨が折れるよ」
木下が土と汗と返り血でぐちゃぐちゃになりながらこっちに来る
「いい方法はあった？」
五十嵐がこんなときでも爽やかな笑顔を絶やさず来る
「生きた心地がしないよ」
武藤がなんとか歩いてくる
「一つ作戦があるんだが乗るか？ある」
「マジで！どんな？」
木下が聞いてくる
「成功率は低いがいいか？」
『もちろん！』
全員が答えた

男にとって金●を打つのはなんとしても避けたいらしい（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2344z/

生き残るには……

2011年12月17日07時46分発行